



大阪商業大学 FD ニュースレター

第 25 号

2024 年 3 月発行

C O N T E N T S

1	公開授業と意見交換会	1
1.1	公開授業	1
1.1.1	対象科目と実施期間	1
1.1.2	実施目的	1
1.2	意見交換会	2
1.3	公開授業を終えて	3
	「健康心理学」 西川 一二（総合経営学部商学科 専任講師）	3
	「金融論Ⅱ」 京極 孝（経済学部経済学科 特任教授）	7
	「地域探究特殊講義」 谷内 正往（総合経営学部商学科 教授）	9
	「職業指導」	12
	尾場 友和（公共学部公共学科 准教授）	
	白羽 保夫（総合経営学部商学科 非常勤講師）	
	「国際経営論Ⅱ」 西井 進剛（総合経営学部経営学科 教授）	13
	「地域探究特殊講義」 衣川 路世（総合経営学部商学科 助教）	16
	「BP 英語Ⅱ」 津村 修志（公共学部公共学科 教授）	18
	「心理学Ⅱ」 林 萍萍（公共学部公共学科 助教）	21
	「日本史概説・日本史Ⅱ」 坂口 正彦（経済学部経済学科 准教授）	24
2	授業アンケート	27
2.1	実施方法	27
2.2	対象科目	27
2.3	教員からのフィードバック	27
2.4	集計結果の開示方法	28
3	FD 研修会	28
4	大学院 FD 活動	29
	「『2023 年度修士論文中間報告会』開催される」	
	宍戸 邦章（大学院地域政策学研究科 教授）	
	《編集後記》	31

1 公開授業と意見交換会

1.1 公開授業

1.1.1 対象科目と実施期間

今年度の公開授業は、後期授業期間の第10週～第11週にあたる2023年11月27日（月）～12月1日（金）に、9つの授業科目を対象に行われた。今回対象となった科目名と担当教員名、開講日時および教室は下表のとおりである。これらの対象科目は、今年度着任した新任教員の担当科目のほか、授業内容や受講者数などを勘案し選出されている。

＜公開授業の対象科目＞

月日	時限	科目名	担当教員	教室
11月27日（月）	1	健康心理学	西川 一二 （総合経営学部商学科 専任講師）	531
	4	金融論Ⅱ	京極 孝 （経済学部経済学科 特任教授）	422
	5	地域探究特殊講義	谷内 正往 （総合経営学部商学科 教授）	521
11月28日（火）	5	職業指導	尾場 友和 （公共学部公共学科 准教授） 白羽 保夫 （総合経営学部商学科 非常勤講師）	4512
11月29日（水）	3	国際経営論Ⅱ	西井 進剛 （総合経営学部経営学科 教授）	421
	4	地域探究特殊講義	衣川 路世 （総合経営学部商学科 助教）	521
	4	BP 英語Ⅱ	津村 修志 （公共学部公共学科 教授）	622
11月30日（木）	3	心理学Ⅱ	林 萍萍 （公共学部公共学科 助教）	521
12月1日（金）	4	日本史概説・日本史Ⅱ	坂口 正彦 （経済学部経済学科 准教授）	531

公開授業の実施については、11月1日（水）の教授会において、FD委員会委員長の西嶋淳教授よりアナウンスが行なわれ、各教員に参観が呼びかけられた。

1.1.2 実施目的

公開授業実施の目的は、参観教員が授業運営方法や工夫に関する新たな知見を得ることに加えて、質問やアドバイス、それに対する回答などを公開授業担当教員と交換し、その結果を互いの授業運営に活かしていくことにある。このため、各授業では参観教員を対象に、興味深い点や参考になる点などを自由記述形式で回答するアンケートが実施された。さらに、公開授業担当教員と参観教員が参加し、対面式で意見を交わす意見交換会が後日開催された。

1.2 意見交換会

公開授業に関する意見交換会は、本学における FD 研修として実施されている。今年度は、2023 年 12 月 13 日（水）16:30～17:30 に本館 6 階研修室において、本学の教職員 19 名が参加して行われた。会次第は次のとおりである。

<会次第>

1. 開会挨拶（FD 委員会委員長 西嶋淳教授）
2. 公開授業担当教員による公開授業に関する報告と参観教員による感想や意見の交換
3. 総括と閉会挨拶（FD 委員会委員長 西嶋淳教授）

科目ごとに公開授業を参観した教員の代表 1 名が感想やコメントを述べ、それから授業担当教員が授業運営上の工夫や苦心している点を報告し、参観教員のコメントに応える、という形で会は進められた。公開授業検討ワーキングの森田学准教授による司会進行のもと、会に参加した教員間で有意義かつ建設的な意見の交換が行われた。

<意見交換会の様子>



1.3 公開授業を終えて

公開授業を担当した 10 名の教員には、意見交換会で報告した授業における工夫や苦心、公開授業を終えた感想、アンケートや意見交換会で出たコメントに対する回答などを文章の形でまとめてもらった。以下では、公開授業の開講日時順に、その文章および公開授業時の写真を掲載している。

「健康心理学」

西川 一二

(総合経営学部商学科 専任講師)

1 はじめに

2023 年 4 月から本学に着任し、「健康心理学」などの心理学の科目や 1 年生のゼミナールを担当しています。本学に着任する前まで、私は非常勤講師等で 7 年間、様々な大学で教鞭を執ってきました。今回、公開授業の対象科目に「健康心理学」が選ばれましたが、この担当科目は本学に着任して初めて受け持った授業科目の 1 つでした。初めて担当する授業科目で、初めて公開授業を実施することになったため、公開授業のお話を頂いた時から内心穏やかな気持ちではありませんでした。

公開授業では、お忙しい中、多くの教職員の皆様にご参加頂きました。後日開催された意見交換会では、参加者の皆様から忌憚のないコメントと暖かい感想を頂きました。この他にも、普段聞くことのできない先生方の授業の工夫や授業の経験談など、貴重なお話を伺うことができました。公開授業ならびに意見交換会を無事に終えたことにホッとしつつ、このような貴重な機会を頂きましたことに、改めて感謝申し上げます。また、授業支援システム manaba（以降、manaba）で公開した授業資料を閲覧頂きました先生方、そして、その資料に関して個人的にコメントを頂きました先生方に感謝申し上げます。

2 授業の概要

「健康心理学」は、(前期・後期共に) 月曜日の 1 限目に設けられている全学科・全学年対象の副専攻科目で、日常生活の中での健康に関する話題を提供しながら、心理学の研究や内容と結び付けて解説していく講義科目です。

授業の形式は、授業開始時あるいは授業前の休み時間に配布した A3 用紙の授業資料をもとに(またスクリーンにも映しながら) 授業を進めていく、一般的な講義スタイルです。受講生には毎回の授業で授業内容を振り返ってもらうレポート課題を与え、manaba を通して(オンライン入力形式で) 提出してもらっています。また、この課題では授業内容に関する質問も受け付けており、ここで挙



がった受講生からの質問に、次回の授業の冒頭で、私が前回の授業のおさらいをしながら回答しています。今年度の後期の履修者数は 289 名（ちなみに前期の履修者数は 305 名）で、比較的多い受講者数となっていますが、毎回の出席者数は 170 名～190 名の間です。

3 授業の工夫

「健康心理学」の授業で工夫している点は、次のように 4 点あります。

3.1 授業における有意味学習

まず 1 点目の工夫は、受講生の有意味学習を促すために、授業で学ぶ内容を日常生活にかかわる事柄と関連付けて教えることです。

「健康心理学」の科目は、心理学を専門としていない本学の学生にとって馴染みのない用語や内容が多く、（心理学を専門としている学生に比べて）敷居の高い科目です。この敷居を下げるために、健康心理学の専門用語や内容を単に解説するのではなく、日常生活にかかわる研究事例または社会問題に関連付けて解説することで、受講生の有意味学習を促しています。

「健康心理学」では、精神衛生の基礎として「子どもの発達」を扱う内容があり、その中で、2～7 歳ぐらいにかけての子どもの「思考」の発達を解説する場面があります。具体的には、2 歳あたりで生じる「頭の中に作り上げているイメージからうまれる思考」が、7 歳にかけて「概念や知識を取り入れた思考」に変化してゆく様相について説明します。「思考」という抽象的な事柄であるがゆえに、心理学を専門としていない受講生にとっては馴染みがなく、イメージしにくいものです。そこで授業では、受講生にも比較的わかりやすい「子どもが描く絵の研究例」を示して、子どもの「思考」の発達を解説しています。

「子どもが描く絵の研究例」

3 歳ぐらいの子どもが描く似顔絵は、(子どもの視点での見えるままの直感的なイメージが影響して) 顔は口と点で書いた目のみの大きな丸で手足は棒になる様子が見受けられます。そこから年を重ねるごとに、(人の身体の構造に関する知識や概念が蓄積されるので) 顔に髪や鼻・耳が描かれ、手や足に関節や指が描かれるといった変化が見られます。この変化が、子どもの「思考」の発達の様相の 1 つとされています。

【参考文献】

鈴木忠 (2021) 「チャイルド・アートの発達心理学 ―子どもの絵のへんてこさには意味がある―」 新曜社

このように、本学の受講生にとって敷居の高い「健康心理学」の学習内容を、日常にかかわる研究例を提示しながら解説することで、受講生自身の経験や体験・知識などの既存知識と結び付けやすい学習、いわゆる有意味学習を促しています。心理学の研究内容は日常にかかわる研究が多いため、「健康心理学」以外の他の心理学の科目でも、有意味学習を意識した授業を展開しています。

3.2 受講生へのフィードバック

2 点目の工夫は、受講生の授業への興味・関心を高めるために、受講生へのフィードバックをす

ることです。

この授業では、毎回、受講生にレポート課題を与えています。このレポート課題の提出要件は、授業内容を振り返ること、または授業内容の感想・疑問・質問を書くことです。それ以外の要件はなく、字数制限ありません。このレポート課題は復習の一環でもあります。受講生には自由に記述させています。提出されたレポートの中には、うまく授業内容をまとめているものや、メモのように自由に書き込んだものもあります。また、授業内容の範囲外の質問も多くあります。そのため授業では、このレポート課題で提出された文章や質問をフィードバックする時間を設けています。

授業では、開始時に前回の授業内容のおさらいをします。次に、受講生からの質問の回答を行います。その際、提出されたレポートの中から、前回の授業内容を簡潔にまとめている文章や私が回答できる範囲の質問文をいくつか選び、スクリーンに提示して読み上げながら、前回の授業内容の振り返りを行ったり質問に答えたりします。

「健康心理学」の授業の質問でとりわけ特徴的なのは、受講生自身の心の悩みや健康に関するものがあることです。こういった質問の場合、前回の授業に関連するように回答することを心がけますが、回答内容によっては、これから学ぶ授業内容や他の心理学科目の授業内容に関連することもあり

ます。その場合は追加資料を作成します。

ここで取り上げた受講生からの反響は良く、次のレポート課題では、「レポート内容を読んでいただき嬉しいです。」

「質問に回答いただきありがとうございます。」というようなポジティブな反応がありました。このように、授業の中で行われるフィードバックを通して、受講生の（嬉しさや楽しさなどの）ポジティブな感情が高まると、その授業への興味・関心も高まると考えています。

このレポート課題にフィードバックをする際の注意点として、多数の受講生に授業への興味・関心をもってもらえるよう、フィードバック対象者が特定の受講生ばかりにならないよう気を付けています。その他、質問内容によっては調べればすぐ答えがわかる内容もあり、その場合は調べ方を案内するなどをして対応しています。

3.3 授業資料の配布

3点目の工夫は、授業内容の理解度を高めるために、授業資料を紙媒体で配布することです。

「健康心理学」では、A3用紙1枚に8～16スライド（PDF形式）を両面印刷した授業資料を2部配布しています。最近の大学の授業では、授業資料をmanabaなどの授業支援システムを使って、インターネットで配布することが主流となっています。授業資料を印刷し配布することは少し面倒ではあるのですが、私があえてこのような方法を取るのには理由があります。

本学では、今年度の授業開始時から5月初旬までの間、「新型コロナウイルス感染症拡大防止に伴う活動制限のガイドラインにおける対応レベル」（以降、「コロナ対応レベル」）により、紙媒体の



授業資料を配布することができませんでした。この時には、manabaを通してスライド教材を配布していました。しかしながら、新学期の授業が始まってみると、(授業スライドを印刷することを忘れていたせい) ノートもメモも取らず、ボーっと座って聞いているだけの受講生が見受けられました。このような受講生の姿を見て、授業内容を理解しているのか不安になりました。



5月初旬以降、「コロナ対応レベル」が引き下げられましたので、紙媒体の授業資料の配布を開始しました。配布する授業資料の一部には、穴埋め部分を付けました。これは受講生に、授業内容に関する私の解説を聞いて、理解して、書いてもらうためです。このように、紙媒体の授業資料の配布で可能になる学習活動は、見て(読んで)、聞いて、理解して、書く活動であると考えています。この活動を通して、受講生の授業内容への理解度の向上を図っています。

3.4 体験学習や動画資料の導入

受講生の理解度を高めるために、もう1つ、授業に体験学習や動画資料を導入することも行っています。これが4点目の工夫です。

「健康心理学」の授業内容の中には、スライドの教材だけでは、受講生に理解してもらうことがいくぶん難しいものがあります。例えば、「感情の神経生理学基盤」などの生理学関連の内容が挙げられます。こういった難しい内容を受講生に理解してもらうために、体験学習や動画資料を導入しています。

体験学習の導入例では、呼吸と自律神経系との関係を解説する際、自分の手首の脈をとって、(副交感神経の一部である)迷走神経系と呼吸のつながりを実感する体験学習を行いました。また、動画教材の導入例として、感情と脳・臓器のつながりを解説する際に動画教材を用いました。ただ、動画教材の導入に関しては、受講生にただ視聴させるのではなく、動画視聴前の予習として、イラスト付きの授業資料教材を用いて、一通り解説した後に動画を流すことに決めています。こうすることで、受講生は事前知識が入った状態で動画教材を視聴することになり、内容の理解がより深められると考えているからです。

4 おわりに —今後の授業の改善—

今回の公開授業ならびに意見交換会で頂きましたコメントにつきまして、今後の授業で改善を図りたいと考えています。とりわけ「授業資料をスクリーンの前に置かないこと」や「授業資料の文字をもう少し大きく印刷すること」は、すぐ改善に努めたいと思います。また「受講生に予習の機会を与えること」については、まだ検討中ではありますが、改善の必要性の高い問題だと考えています。現段階の改善案としては、授業の終わりに、次回の授業で学ぶ用語やキーワードを提示するなどして、受講生に予習の機会を設けることを考えています。

この度、公開授業ならびに意見交換会では、自分では気づけなかった問題点や新たな視点を得ることができ、非常に有意義な時間を過ごすことができました。また、着任1年目にも関わらず、暖かい感想も頂き、非常に勇気づけられました。このような貴重な機会を頂きましたことに、教職員の皆様に改めて感謝申し上げます。



「金融論Ⅱ」 京極 孝 (経済学部経済学科 特任教授)

1 はじめに

令和4年の4月から1年間非常勤講師としてお世話になり、令和5年4月からは特任教授として「金融論Ⅰ」および「金融論Ⅱ」をはじめとした金融に関連する科目を担当しています。今回の対象科目は「金融論Ⅱ」の第10回目授業で、テーマは「中央銀行（日本銀行）の機能と役割」です。教員経験は10年以上になりますが、前職は金融機関（銀行およびベンチャーキャピタル）に35年間勤務したのち、別の大学で教員としての職務を始めました。したがって、実務経験者として授業内容も理論と現実（事実）のバランスを取りながら進めています。



2 授業運営上の工夫

2.1 対象科目の授業運営の特徴

「金融論Ⅱ」は、金融の基本を扱う「金融論Ⅰ」に続く応用や深掘り、広い範囲のテーマを扱います。そして、経済学部の専攻科目のうち、「基幹科目」の1つとして位置づけられています。

科目の特性から受講者が多いこと、また金融について初学者が多いため、授業の形態は講義型にならざるを得ない状況です。本来であれば、アクティブラーニング手法を使った議論や質疑応答など、双方向の授業が理想ですが、上記事情から講義型を前提とした授業運営の中で工夫をしていく必要があるわけです。

2.2 教材（授業用資料）の作成

この授業では、市販の教科書を使用していません。授業用の資料はすべて手作りで作成しています。その最大の理由は、「金融論」と銘打った教科書・参考書は数多あるものの、その殆どが根本的な部分で誤解があること、机上で成立する理論であって現実にはあり得ないことが多く、利用したくても利用できないのが実情です。

特に、現在の主流派経済学は、金融を理解するための基本的テーマでありながら、近年では学問



的に流行らない「貨幣論」や「銀行論」に関しての正しい知見を有していませんので、その他の応用編でも誤りを犯していることが多いのです。そこで、やむを得ず授業用資料を自ら作成し、その資料を基に授業を行っています。

授業用資料はパワーポイントを使用し、文章だけでなくグラフや表、図解を使ってビジュアルな面からもわかりやすい表現を心掛けています。併せて、難しい内容の授業テーマであっても、学生

が興味、疑問を持って自分で調べるとともに考えることを重視したものを目指しています。

2.3 授業内容の工夫

一口に金融といっても、その対象はかなりの広がりとお行きがありますが、この授業では学生が社会に出たときに役に立つ知識を中心に扱っています。実際には、現実（事実）を縦糸に、理論を横糸にして、2つのバランスを取りながら実学に近い形で講義を組み立てています。

金融というと、一見難しそうに感じる受講者が多いのですが、世の中の仕組みや世間で起きていることを理解するための基本的知識であり、社会やビジネスを理解するためや個人が社会の中で生きていくための必須知識でもあります。学生諸君には、まずこのことを理解してもらうことを最初の段階で重視しています。

一般的な金融論では、現実（事実）は殆ど無視され、理論のための理論や机上では成立しても現実を説明できない理論が少なくないのですが、こうした理論は反面教師の事例として紹介するに止めています。

なお、上述の授業用資料では、授業テーマの理解に必要な内容は全体の80～90%程度にとどめ、講義を聴くことによって100%の理解が可能になるような工夫もしています。

2.4 教材の公開と予習・復習

作成した授業用資料の履修者への公開は、遅くとも授業予定日の3週間前までにはmanabaのコンテンツに掲示しています。これは、ゆとりをもって予習（全体像の把握、専門用語の理解など）を行えるようにするためです。

また、各授業後に必ず課題を与えていますので、授業用資料を中心とした復習を促すためでもあります。

2.5 出席率の向上と授業への参画

出席は成績評価の基準ではありませんが、授業に出席して講義を聴き、重要なことをメモやノートテイキングするのは学生として当然のことです。少しでも出席率を上げるために、上述のように授業用資料だけでは完全な理解は難しいことを理解してもらい、また現実の世界で起きていることを授業で取り上げて解説することを通して、疑問や興味をもって自分で考える癖をつけるような授業運営を目指しています。ただ、実績という観点からは今後もまだまだ工夫が必要であると感じ

ています。

2.6 授業中の工夫と課題

授業への出席の必要性和、それに加えて講義をよく聴きノートテイキングを行い、自分で考えることの重要性については、毎回の授業の中でも常に伝えていますが、現実としては難しいことも感じています。

単位の取得と好成績を獲得するためには、上記の授業取り組み姿勢が必要であることを初回授業から折に触れて伝えていきます。最終授業では確認テストを実施しますが、試験の範囲は授業用資料だけでなく、講義内容すべてであることも常々伝えていきます。しかし、一部の学生を除くと受講態度が改善されているとは言い難い面もあります。

学生側の認識がまだまだ甘く、授業にとりあえず出席して、課題を適当に提出しておれば単位は取得できると誤解されているようなところがあります。それでは理解力や思考力、表現力が身につかないことを、どのように伝えていくかが課題でもあります。

授業中は、科目特性や受講者が多い点からどうしても一方的な講義型とならざるを得ないですが、時折簡単な質問を投げかけたりしながら、学生の緊張感を途切れさせないように工夫することがせいでいと言えます。

3 いただいたコメントについて

公開授業後の意見交換会でいただいたご感想では、気を遣っていただいたのかお褒めのお言葉を頂戴して恐縮しております。

この授業では、単なる理論の紹介と解説にとどまらず、現実や実務を理論的に解説することを目指しています。したがって、教える側も常に変化していく現実（事実）をキャッチアップして、正しい状況判断とその原因及び結果を分析していく必要があります。今後も、専門的分析手法や情報収集、より分かりやすい授業の改善を続け、学生諸君の知的興味を刺激できるように研鑽していくつもりでいます。



「地域探究特殊講義」

谷内 正往

(総合経営学部商学科 教授)

1 はじめに

私の担当は「地域探究特殊講義」で旧名は「大阪の商業Ⅱ」です。「大阪の商業Ⅰ」で大阪の卸売、小売業をあつかい(現在、科目廃止)、「大阪の商業Ⅱ」で私の専門の鉄道と商業を講義してきました。本講義では、商業の基本知識＋関西の鉄道企業の成り立ち、その多角化における小売業のありかたを中心に説明しております。

2 授業の工夫

授業の進め方はコロナ禍により大きく変わりました。第1に、板書・授業プリントから manaba を使ったスライド掲示、小テスト、レポートを利用するようになったことです(毎回)。コロナ禍で

教科書を読むだけでは十分な理解ができないと考え、パワーポイントでスライドを作り、PDF ファイルで配布しました。当初は、Zoom による説明動画(15 分×2 本)を配信したこともあります、携帯電話で受講する学生もいるので、数回で中止しました。小テストは簡単な 2 択で 10 問程度作成しました。これは他大学の教員の実践を参考にさせていただきました。2 択という気楽さと 10 問という問数によって、気軽に取り組み、要点の定着も図れたと考えます。レポートは 300～400 字程度の記述問題としました。内容は授業の要約であったり、論点になりそうな問題を問うて、自分で調べて考えてもらったりしました。字数のすべてがオリジナルでなくていいので、要約などは解答率が高かったです。



第 2 に、対面授業の方法を少し変えました。対面でも manaba を使った授業スタイルは継続しましたので、事前にスライドを参照する学生、スライドを印刷して持参する学生がわずかですが出てきました。

対面授業の説明では、15 分ぐらいを基準に 1 つの説明が完結するよう心がけました。また、「問いかけ」を多くするようにしました。例えば「なぜ多くの私鉄は兼業＝多角化を進めたのでしょうか?」「なぜ阪急は梅田のターミナル駅に百貨店などの商業施設を設置したのでしょうか?」といった感じで、30 秒考えて下さいと伝えました。答えられない問いもありますが、短い時間を設定することで集中力が高まり、理解も進むと考えました。

授業では説明の合い間に数分の動画をはさみこむようにしました。10 分になると学生は集中できなくなるようで、説明に合わせた動画がタイムリーに流れて、しかも問いかける形の動画であればなお良いことがわかったからです。授業には変化が必要だと気付きました。

授業では説明の合い間に数分の動画をはさみこむようにしました。10 分になると学生は集中できなくなるようで、説明に合わせた動画がタイムリーに流れて、しかも問いかける形の動画であればなお良いことがわかったからです。授業には変化が必要だと気付きました。

これまでの自身の授業と異なるのは、(出席確認システムの)簡易アンケート機能を使って、リアルタイムで問いに対する回答を集めたことです。「今のビデオで駅高架下をどのような用途に使っているか想像してみましょう」と問うて回答してもらい、それを読み上げていきます。必要に応じてコメントをはさみます。ある意味、深夜ラジオのディスクジョッキーのようなやり方です。学生にとっては、正解に加えて自分の回答が読まれるかどうかに関心事になるようです。

3 苦心している点

他に「商学概論Ⅰ・Ⅱ」と「商業史Ⅰ・Ⅱ」を担当しています。いずれも基礎から積み上げ型で説明できるので良いのですが、この「地域探究特殊講義」は応用科目でありながら、1 年次から受講できることもあり、「初学者が専門知識を必要とせず、わかりやすい説明をすること」に苦心しています。

私はカルチャーセンターや市民講座でもお話をさせていただいています。高齢者で人生経験や知識が豊富の方々はスーッと理解して面白いと思ってくださるのですが(中には必死にメモをとる方もいます)、若い学生の場合は反応がないことが多いです。その際には、改めて予備知識を説明した

うえで講義するようにしています。また毎回いろいろな地域を扱うので、学生自身が知っている地域を紹介した時の反応はよいです。

出席せず、スライドを見て小テスト&レポートを回答する学生が一定数います。シラバスでは対面授業必須として、授業時の簡易アンケートなどで動機付けをしているのですが、十分な効果は出ていません。授業では出席することで新たな発見があると伝えています。

4 授業参観者のコメントへの回答

<コメント1>

教室が広く前と後ろに分かれて座っていたがやりにくくなかったか？

<回答>

はい。確かに大教室で中間がぽっかり空くのはよくありませんが、特に気になりませんでした。恐らく昨年2限から5限へ移動したために受講者数が減少したにもかかわらず大教室のままだったことも原因です。

<コメント2>

試験対策として書画カメラで板書をしていたが、書いている人は少なかった。

<回答>

とくに気に留めていませんでした。今後注意してみます。

<コメント3>

事前にレポートの評価基準が明示してあり新鮮だったが、どれだけの大学生が気にしているのか知りたく思った。

<回答>

たしかに、気にしない学生が多いと感じています。ただし、基準を守っていない答案を紹介することで、アナウンスメント効果があるものと信じています。常に期末試験(記述式)を意識して授業をしているので、繰り返すことでなにがしかの効果が出てほしいです。



5 おわりに

6~7年前にも公開授業をしましたが、当時と比べて自分の授業が変わりました。専門的な説明がすこし不十分であっても、まずは目の前の学生の理解度に合わせて、段階的に説明をくみ上げていくことを学びました。そのことが回りまわって学習効果を高めると実感しています。また、manabaなど、授業支援システムの利用はうまく使えば学習の動機付けの1つになることを今さらながら認識した次第です。毎年学生が変わるように、授業も変わらねばならないと実感しました。

「職業指導」

尾場 友和 白羽 保夫

(公共学部公共学科 准教授) (総合経営学部商学科 非常勤講師)

1 本科目の概要

本授業科目「職業指導」は、教育職員免許法施行規則第五条にある「教職に関する科目」と「教科に関する科目」の科目群のうち、商業科の教職免許に必要な「教科に関する科目」の1つである。

「教職に関する科目」の中には、本科目と同じような名称の「進路指導及びキャリア教育の理論及び方法」に関する科目(本学では「生徒指導・進路指導論」)がある。こちらは「教職に関する科目」であるため、どの教科の免許状取得においても必要な科目であり、学校現場で行われている進路指導の原理、考え方、指導方法等を扱う。いずれも生徒に将来のことを想像させ、それに備えて在校中にどのような準備をしないといけないか、卒業後の生活でどういうことを考えないといけないか、知識や態度を育成する科目である。

こうした事情により、本科目では、「生徒指導・進路指導論」では扱いきれなかった、就職指導の前提となる職業世界を理解するうえで必要な汎用的知識を扱う領域と、多くの商業高校で取り組まれている職業資格の取得を通じた商業教育、すなわち簿記検定の指導を扱う領域に分け指導計画を立てた。前者については、私、尾場の専門分野である教育社会学やその隣接領域である労働社会学の知見を扱う。後者については、①教育方法学の知見を活用した授業づくりの基礎理論、②白羽先生(専門:簿記論)とのチームティーチング形式で学生による模擬授業を教材とした実践的な指導方法の演習、からの構成になる。

2 授業の工夫

本科目の特性上、授業では学生が単に専門領域の知識を身につけるだけでなく、それをわかりやすく伝える技術を身につけられるように指導しなければならない。

公開授業では前節後者の②を扱った。最初の3回の授業では白羽先生およびゲストスピーカー(現役高校教員2人)による模擬授業を披露していただき、指導のポイント(高校生が間違いやすい箇所など)を解説した。最初に授業の型を示すことは、生徒への発問や教材作成、教材の提示法などの教育行為に対し、教師がどのような意図に基づきその行為を選択しているのか、学生に認識させる狙いがある。

4回目以降の授業では、学生が簿記の検定教科書を用いて初級～中級程度の単元を模擬授業する(1人あたり35～50分)。模擬授業を行う教員役の学生は、授業準備の重要性や学習者目線で授業を捉える必要性を実感する。また生徒役の学生は、模擬授業を通じて学習内容を整理し、指導方法の多様性を体験的に学び、自らの模擬授業に対し省察が促される。



私がこの授業で特に心がけていることは、「ここでは何度でも失敗し放題(教育実習では失敗しない)」、「より良い授業作りのためにみんなで考える」の2点を学生に浸透させることである。これに共感する学生を1人でも2人でもつくり、それが教室の中で点在するようになればやがて線となって全体へと広がっていく。現段階ではまだ3割程度の学生からしか意見が出てこず、点から線への移行期だと捉えているが、幸いにもその3割による授業貢献は大きく、なんとか円滑な授業運営ができています。



3 今後の課題

今後の課題としては、受講学生の特性が授業の質にも関係するため、学生の特性をいかに理解し学生の積極性を引き出すかである。教職の授業においては、授業担当者は、好むと好まざるとにかかわらず、「先生の先生」という立場になり、学生の模擬授業の拙さを拙い指導で返すような地獄絵図はどうしても避けなければならない。

FD 委員として参加させていただいた授業や検討会で頂戴した先輩諸氏のご意見を参考に、さらにより良い授業を追い求め研鑽を積んでいきたい。

(執筆担当：尾場友和)

「国際経営論Ⅱ」

西井 進剛

(総合経営学部経営学科 教授)

1 工夫している点：双方向志向型授業形態の採用

工夫している点の基本にあるのが、双方向志向型授業形態の採用です。現在、少人数向けの授業を除くと、今回の公開授業の対象となった「国際経営論Ⅰ・Ⅱ」、同様の授業形態を採用している「経営管理論Ⅰ・Ⅱ」の授業を担当しております。いずれも履修者数は250～330人ほどで、学生数や教室の広さからいっても、双方向型授業を実施することはなかなか難しい環境です。しかしながら、本学においては、幸いにして manaba 等の授業支援サービスが充実していることもあり、それらの機能を活用することで、できる限り双方向を志向した授業が実現できるよう工夫しております。具体的には、以下のような点について取り組んでおります。

1) 授業に対する学生の反応の速やかな把握

学生に対して、毎回の授業において、その回の授業についての感想・質問・要望を manaba のレポート機能を使って提出することを課しております。期限は、その授業が終わった時間から翌日の終日(23時55分)までとしております。これにより、毎回の授業で学生がどの程度理解している

のか、どのような点に関心をもっているのか、授業の改善点はどこにあるのか等を素早く把握することができます。加えて、後述するように、授業内容に即した課題の提出も課しております。



2) 学生の反応に対するフィードバック

学生から得られた授業についての感想・質問・要望の中から、多くの学生が同様の反応をしているものや注目すべきものを次の授業の冒頭で紹介し、回答・対応するようにしております。また、学生の反応によって、授業内容の補足や再度の説明を加えたり、次回以降の授業内容全体の調整を行ったりしております。

3) 演習の実施

授業は、座学中心の回（講義回）と演習中心の回（演習回）という2回を1つのセットとしております。座学中心の講義回が終わった後で、授業内容に即した課題について学生に取り組んでもらいます。

たとえば、公開授業の回（プロフェッショナル・サービスと国際ビジネス）においては、「本日の講義内容を踏まえ、日本のプロフェッショナル・サービス企業の海外進出事例について調べ、どのような優位性を発揮しているのかについて考察する」という課題に取り組んでもらいました。**manaba** のレポート機能を使い、調べた結果と学生自身の考察を700字程度にまとめて提出することを課しております。じっくり取り組んでもらいたいので、期日は次回授業の前日終日までとしております。

演習回では、4～5人程度のグループをつくり、①提出内容の共有、②共有した内容を踏まえた対話、③グループワーク結果の発表、を行います。グループワークに学生が慣れてくると、より高度なグループワークとして、議論や討論を行ってもらったりワールドカフェの実施をしたりと、グループワーク自体にも変化を付けております。この演習回の感想等についても提出を課しております。優れた内容のレポートについては、次の講義回において紹介、解説を行います。

以上のような取り組みにより、履修者の多い大教室での授業ではありますが、双方向を志向した授業の実現を試行しているところです。

2 苦心している点

苦心している点は、工夫している点の裏返しとなります。公開授業アンケートでもコメントや質問をいただきましたが、実際のところ、上述の双方向志向型授業を行うにはかなりの労力が必要とされます。具体的には、以下のような点で苦心しております。

1) 資料作成にかかる労力

学生の反応（感想・質問・要望の紹介・回答、優れたレポートの紹介・解説）を全員で共有する

ためには、提出された感想・質問・要望、課題の全てに目を通す必要があります。この部分の資料作成だけで概ね 2〜3 時間程度かかってしまいます。講義内容自体の資料については、テキストを指定し、その内容に即して授業を実施することで省力化を図っております。しかし、一般論になりますが、どれだけの学生がテキストを購入し、予習・復習してくれるのかというところが担保できませんので、結局のところ、課題をこなしてもらうためにも、復習がしやすいよう配付資料を充実させる必要があります。こちらかなりの作成時間を要しております。

2) 講義回、演習回に適した授業環境の確保

学生からの反応をある程度ダイレクトに掴むことができるということは、同時に、それに対して応える必要があるということを意味します。講義回においては、寝ている学生、スマホを触っている学生、私語をしている学生等に対して、真面目に授業を受けている学生からのクレームがものすごく出てきます。そのため、その都度の注意はもちろんですが、一緒に授業をつくっていくという行動規範を生み出せるように力を注いでおります。演習回では、教室内を移動し、グループワークの様子を確認しています。いわゆる「ファシリテーション」についても学生に対して指導しております。

3) 提出された感想や課題の内容の確認作業

この点については、公開授業アンケートでも質問がありましたが、コピペや ChatGPT に代表される生成 AI への対応となります。双方向志向型授業を実現するために、感想・質問・要望の提出を 14 回、課題の提出を 7 回、課しております。これらの感想・課題の内容についての評価の積算がそのまま学生の評価になります。期末試験は実施しておりません。そのため、これら感想や課題の提出内容について公正性を確認する作業が必要となります。

感想については、正解を求めているということを強調し、学生自身の言葉で感想を述べるように伝えております。課題については、参考にしたウェブサイトの URL 等を必ず明示することを条件とし、自らの考えと分けて記述するよう求めています。

それでも、コピペや生成 AI を利用したような内容のものが提出されることがあります。そういった場合、その都度チェックツールを使い、内容を確認すると共に、次回の授業において注意喚起を行うようにしております。実際に、注意喚起を行うと、疑わしい回答が提出されることは減少します。

3 今後の課題

今後の課題は、双方向志向型授業の「持続可能性の担保」とさらなる「質保証の担保」が挙げられます。まず、「持続可能性の担保」については、行動規範を生み出せるような取り組みをより充実させていきたいと考えております。個人的には、学生を萎縮させることにもつながるような厳密なルール化という手法は用いたくはありません。そのため、



時間はかかるかもしれませんが、実際に企業等で実施されている経営理念の浸透、内部化の取り組みを参考に、教員、学生がお互いに敬意を払いながら授業をつくっていくという行動規範を形成していければと考えております。次に、「質保証の担保」については、学生自身の学びの気づきをいかに自覚してもらうのか、ということにより努めていきたいと考えております。この点については、講義回の授業においても、対話形式を導入していくことを検討しております。

「地域探究特殊講義」

衣川 路世

(総合経営学部商学科 助教)

1 はじめに

2023 年度より本学に着任し、「地域探究特殊講義」「総合教養 F」「ゼミナール I A・I B」を担当しております。「地域探究特殊講義」の公開授業を通して、ご参加いただいた先生方、職員の皆さまから多くのご意見を頂戴いたしました。教壇側からでは中々気が付かない点について見直す大変良い機会となりました。この場をお借りして御礼申し上げます。

2 授業の概要

「地域探究特殊講義」は、副専攻科目のうち、ソフトパワー関係科目地域探究領域に属する科目で、配当年次は1年次です。地域探究領域は、地域の特徴や成り立ち、歴史的な視点を踏まえて学修することができる科目を配置するものです。そこで本講義は、地域として「熊野」を取りあげ、主に信仰に関して地域の特徴を解説・検討することを主題としています。具体的な授業の構成としては以下の通りです。

- (1) 「熊野」の地域と信仰について知る
- (2) 「地獄」の概要について知る
- (3) 熊野信仰における「地獄」とその特徴について知る

授業は PPT をスクリーンに投影し、その内容を基本として解説をする形で行っています。受講生にとって馴染みのない地域・文化・信仰について扱うことが多いため、図像や動画等の視聴覚資料を活用しながら、興味関心を持ちやすくなるように心がけています。また、公開授業の際にコメントでもいただきましたが、「話し方」についても、なるべく親しみやすく、明るい印象を持ってもらえるように意識しています。

課題については、おおよそ 2～3 回に 1 度のペースで、manaba に授業の感想・意見を提出する形で実施しています。授業の内容・覚えたことを書くのではなく、「授業を受けて自分が考えたこと」



を 300 字程度で提出させるようにしています。

3 公開授業でいただいたコメント・質問への回答

公開授業後の意見交換会において、先生方からいただいたコメント・ご質問について項目ごとにまとめて回答いたします。

1) 私語について

- ・大教室であるにもかかわらず、私語をする学生が少ない。
- ・私語の防止方法について知りたい。

<回答>

私語については、授業の第 1 回目・第 2 回目で厳しく注意をするよう心掛けました。前期も 400 名弱が履修していたため大教室での授業でしたが、私語に関してなかなか指導がいきわたらず、「真面目に授業を聞きたい」学生たちの集中の妨げになっているような状況が少なからずありました。そこで、後期では前期での反省から、授業の第 1 回目・第 2 回目に実施する授業の概要説明の際に、「私語は周囲の迷惑になるため、慎むこと」を前期以上に繰り返しアナウンスしました。その成果か、前期ほどの騒がしさはなくなりましたが、それでも「小声であれば聞こえない」と考えている学生が多く、私語が全くない状況を作ることはできませんでした。この点については、根気よくその都度注意をして、「話してはいけない」という意識を育てることが改善に直結すると思っています。また、次年度以降では、授業の中盤で「ディスカッション」などの「学生が話す時間」を取ることで、リフレッシュを図り、メリハリのある授業になるよう計画しています。



2) 出席率について

- ・出席率が大教室としては高い。何か工夫はあるか。

<回答>

出席率については、おおよそ 60%前後で推移しています。受講生には、授業の第 1 回目・第 2 回目に、全体を通して出席していなければ授業内容の理解ができず、レポート課題の作成が困難であることを伝えています。また、出席する動機が「おもしろいから」「聞きたいから」となるよう、なるべく学生の興味・関心を意識して授業を組み立てています。例えば、関西に関連のある伝承を紹介したり、ポピュラーカルチャーと関連付けて「地獄」の説明をしたりするなどの工夫をしています。

3) その他

- ・聞いているだけでは眠くなる学生がいるのではないかな。

<回答>

基本的には講義形式のため、「聞く」ことが中心の授業になりますが、なるべく意識が授業に向くように受講生への問いかけを行ったり、映像資料を視聴したりする時間を設けています。しかし、それでも集中できずに眠気を催す学生が一定数いるため、今後の授業では、簡単なグループディスカッションを行うなど、「話す」ことで授業への参加を促すことを計画しています。

・ノートを取る学生がほとんどいないが、資料公開はどのようにしているのか。

<回答>

ノートについては、適宜メモを取るように伝えていますが、なかなか定着しませんでした。基本的に資料は manaba 等では配布していません。試験についてはレポート課題を提出させていますが、「覚えたことを書く」よりも「授業を受けて自分なりに考えたことを書く」を重視しています。そのため、授業時に自分が考えたこと、思ったことをメモするように伝えていきます。今後は、こまめに声掛けをする、ノートテイク用の資料を提示するなどの取り組みを行っていきます。

4 おわりに

2023 年 4 月に着任して以降、「地域探究特殊講義」をはじめとして授業を行う中で、本学における学生のニーズを把握し、授業に反映できるよう工夫を重ねてまいりました。しかしながら、出席率、課題提出率、授業への参加度、授業内容のわかりやすさなど、改善すべき点は多くあることを痛感しています。授業がより良いものになるよう、今後も取り組んでいきたいと思ひます。

最後になりましたが、公開授業・意見交換会にご参加・コメントをいただきました先生方・職員の皆様に改めて感謝申し上げます。



「BP 英語Ⅱ」

津村 修志

(公共学部公共学科 教授)

1 授業の目標

公開授業時の到達目標は、①「地図を使って道順が説明できる」、②「リスト中の動詞を使って現在完了形の文を口頭で正しく作成し、相手の経験を尋ねることができる」の2点でした。

①については「建物の位置関係を描写できる」、「1本の通りにある建物を特定できる」、「左、または右に曲がる、横切る、などの表現を使って道順を言える」などの練習を重ねてきましたので、今回の練習は既習事項の確認を実際の会話に近い形で行おうというものでした。②についても過去の動作・行動の表現練



習、動詞の過去・過去分詞の復習、過去時制と現在完了時制を区別する練習、さらに口頭での言い換え練習も行ってきましたので、これまでの学習内容をゲームで確認しようと意図したものです。

どちらもやるべきことが多く、1回の授業で導入、練習、到達度確認という流れが収まりきらないので、帯活動として5回～7回ほど使っています。

2 受講学生

「学生の反応が良い」、「活発なインターアクションが見られた」などのコメントをいただいておりますが、これはこの授業が選択科目であって、そもそも英語が嫌いという学生が履修しない（はずの）クラスだからだと思います。つまり、学生に恵まれているだけのことです。

3 必修英語の現状

必修英語クラスでは、約7割前後の履修者が「英語が嫌い」または「どちらかと言うと嫌い」と回答していますので、何をやろうと「活発なインターアクション」を誘発するどころか、声を出させることも難しいです。そんな中にも英語が好きだという学生がわずかにいますが、大多数のやる気のない学生の対応が主になってしまい、やる気のある学生が置き去りにされているのが現状です。語学が必修であることによって、伸ばすべき学生の学力を伸ばせないという、残念な状況にあることをご理解いただきたいと思います。誰のために、何のために授業をやっているのかと疑問に思っている先生方も少なくないでしょう。



4 教室で行う活動

幸い、このクラスの学生は意欲がありそうなので、実際のコミュニケーションに近い活動をできるだけ入れたいと考えています。「出席」に重点を置くことができない上に、コミュニケーション活動を入れないのであれば、すべて **manaba** でやってもいいくらいですが、教室に来させる以上は、教室でしかできないことをやらせるべきだと考えています。リーディング、リスニング、知識の蓄積は、やる気さえあれば自分1人でできるでしょう。また、説明を聴くだけの授業なら、動画にしていつでも見られるようにしておく方が、自分のペースで何度でも確認できるという点でメリットは大きいでしょう。このように、知識の蓄積はいつでもどこでも比較的容易にできると思います。ただし、「使う」ことを意識しない知識はすぐに忘れるだけで、結局無駄な学習だったと覚えることになるでしょう。試験が終わればすっかり忘れてしまうような知識なら、その分、貴重な時間を他に充てた方がいいと思う次第です。そういうわけで、「使う」ことを最も重要な活動ととらえています。

5 コミュニケーション活動のメリット

現実の会話に近い形で「使う」活動にはメリットがあります。第1に、学生のニーズに合っているようです。何度かニーズ調査をした結果、習熟度や英語の好き・嫌いに関わりなく、学生はスピーキングに関心があることがわかっています。一方で、文法やリーディングをやりたいという学生

は少なく、英語嫌いの多くの学生にとって現在の英語授業がどれほど苦痛であるのか容易に推測できます。第2に、文法を基本としたコミュニケーション活動は具体的な到達目標の設定が容易です。また、目標が具体的であるからこそ、達成感も得られると考えています。



6 学習者の自立

いつも悩んでいるのは、「どうすれば学習者の自立を促すことができるか」という点です。語学の授業は教室学習だけで完結するものではありません。授業時間だけでは全然足りません。会話の瞬発力や持続力は、自分で時間を作って練習しないと養われることはないでしょう。そこで、学習者が自分で学習目標を設定し、学習計画を立て、学習を管理・評価できるように、つまり、いずれは自分で勝手に学習するように持って行きたいわけです。そのためには、「自分でも少し頑張ればできるようになる」と実感させる必要があると思います。そう思わせるためには、具体的な到達目標を示すことが不可欠です。そこで、まず目標を絞ってから授業中の活動を計画するようにしています。

7 到達目標と達成感

毎回、具体的な目標を明言し、達成感を持続させる（連続して与える）ことができれば、いつか自分で学習してくれると信じています。今回の授業のように「現在完了形を使って相手の経験を聞くことができる」というような目標であれば、できるようになったかどうかを学生自身が確認しやすいでしょう。一方、たとえばリーディングの場合、「読めるようになった」という実感を持たせることは容易ではありません。具体的に何が読めるようになったのか、レベル、語彙、ジャンルなどを限定する必要がありますし、「読める」とは何を指すのかという点も具体的に決めておかねばなりません。「要約できる」、「日本語に訳せる」、「質問に答えることができる」、あるいは「英文の指示に従って何らかの行動ができる」など、具体的に示さないまま授業を行っても達成感を感じさせることは難しいでしょう。学生によってはテストのスコアの上昇で達成感を得られる者もいますが、スコアは「何かができる」指標ではなく、抽象的な目標にしかなり得ないばかりか、変動も大きいです。

8 その他、注意している点

最後に、授業を組み立てる上で考慮している（少し細かい）点を挙げさせていただきます。

1) 長時間の活動は避けて素早く他の活動に切り替えるようにする

活動に変化があれば気分がリフレッシュされ、授業に対する集中力が持続すると思います。そういうわけで、1回の授業でいろんなことをやらせています。また、学生が何もしない時間を作らないように、できるだけテキパキとやりたいと思っています。実際には、そううまく行かないのですが・・・。

2) 座ったままにさせない

立ち上がって動き回る活動を、退屈な活動（たとえばテキスト課題の解答確認など）の後に入れるようにしています。これは単純に眠気覚ましです。活動によっては学生が走り回ることもあって、そのため大きな教室をお願いしています。

3) 教科書の課題提出期限は前日の午前0時に設定する

教室に来てから他の学生に答えを見せてもらおうとする学生がいるためです。

4) 声を出させる

本当は実際の会話に近い活動がもっとできればいいのですが、日本人同士の会話ではうまくいかないことが多いようです。そこで、毎回シャドウイングをしています。教科書のダイアログについて必ずシャドウイングを行うよう指示していますが、やっている学生は少ないです。音声はスマホで聴けるので、教室外で練習してもらいたいところですが、自分でやらないのなら授業でやろうというわけです。クラスにもよりますが、全員で行えば授業に活気が出るようです。

シャドウイングは、リズム、イントネーション、アクセントなどの矯正だけでなく、発音にも良い影響があります。発音が良くなればリスニングの力も伸びるでしょうし、20～30回も練習すればほとんど覚えてしまうことになりますから、表現力も身につくだろうと思います。何より、教科書を見ずにできるようになったときの達成感が自信とやる気につながるのではないかと期待している次第です。

以上のようなことを考えて授業をしております。コメント、ありがとうございました。



「心理学Ⅱ」

林 萍萍

(公共学部公共学科 助教)

1 はじめに

2023年4月に本学に着任し、「心理学Ⅰ」「心理学Ⅱ」「社会調査法」「社会調査統計学」を担当している。今回は「心理学Ⅱ」を公開授業として行った。公開授業の対象となった第10回目の授業は、「自己評価」がテーマで、アイデンティティや自尊感情および自己評価維持モデルに関する内容であった。以下では、授業運営における工夫と公開授業でいただいたコメントに対する回答を記述する。

2 授業運営上の工夫

2.1 授業で用いる資料

授業の資料には多くのイラスト・画像や日常の事例および関連動画を活用して、心理学の概念を視覚的にわかりやすく説明するようにしている。例えば、心理学の実験を紹介する際に、実験の手続きをイラストなどで示すと、学生は実験の内容をより具体的にイメージすることができる。

2.2 実験の導入

授業内で心理学の実験やテストを実施することで、抽象的な心理学の概念を、学生が実際に体験し、理解を深めることができる機会を提供している。受講生が約 400 人いる大教室で実験を行なうことは少し困難であるが、manaba のアンケート機能や PPT の録画機能を用いて事前に動画を作成することで、できるだけ心理学実験を取り入れるようにしている。例えば、公開授業では「潜在的自尊心」をより理解してもらうために、manaba のアンケート機能を利用して、26 個のアルファベットに対する好意度を直感的に評価してもらう課題を行った。他のアルファベットよりも自分のイニシャルのほうが好まれるという「ネームレター効果」の実験である。このような実験を通じて、学生は理論を学ぶだけでなく、実際の現象との関連性を実感でき、その知識を実践的に活用するスキルを身につけることが期待できる。

2.3 双方向で能動的な学び

課題の解説や質問への回答を通して、双方向の学びを実践している。各授業で小テストを実施し、学生の理解度を確認するとともに、授業への感想や質問を収集している。次回授業の冒頭で小テストの解説と質問への回答を行い、前回の授業内容を復習し、学生の理解が不十分な部分や関心が高いトピックについて掘り下げ、新たな知識の習得につながるようにしている。

授業内で実施するクイズを通して、学生の能動的な学習を推進している。代表的な心理学の理論と関連する実験を紹介する際には、実験結果の詳細を説明する前に、manaba のアンケート機能を使用して学生に実験結果を予測してもらう。学生の回答を集計し、授業内で共有した後に、それぞれの回答について、なぜそう予測したのかを複数の学生に口



頭で答えてもらう。このように、講義を一方的に聞くだけでなく、実験結果を予測することで、学生は自分で考え、得た知識を活かす力を養うことができる。また、他の学生の回答を聞くことで、異なる視点や意見を知ることができる。その後に実際の実験結果と関連理論を説明し、学生が自分の予測との違いを確認できる機会を提供している。

2.4 積極的な授業参加の促進

積極的に授業に出席し、真面目に取り組む学生が評価されるような仕組みを作るようにしている。原則として、授業に出席した学生の課題のみを受け付けるようにしている。ただし、部活動の試合や就職活動など、やむを得ない事情で授業を欠席することを事前連絡 (manaba の個別指導を利用) した学生については、課題を受け付けている。また、授業内でしか回答できないような「ボーナス課題」(詳細は後述) を、事前の通知なしに不定期に出題している。

2.5 多様で魅力的な課題

本授業では定期試験を実施せず、各授業後に行う選択式の「小テスト」と「記述式課題」が 7

割、学期の中間と期末に実施する「レポート課題」が3割、という配分で成績を評価している。また、「ボーナス課題」の点数をこれに加点している。

「小テスト」は、授業内容の理解度を測るための問題が中心となっており、難易度はやや高めに設定している。授業資料の内容そのものではなく、心理学の理論に対する理解や授業内で紹介した事例などの応用が求められている。一方、「記述式課題」は、日



常生活における事例（体験）を挙げて、心理学の理論に基づき自由記述回答する課題である。「レポート課題」は、学習した内容から関心のあるテーマを1つ選び、1200字程度のレポートを作成するというものである。「ボーナス課題」では、授業内容と関連する心理尺度や心理学実験などを実際に体験する問題を設けている。このように多様な形式の課題を取り入れることで、学生が単なる知識の理解だけでなく、その応用や実験的な経験を通して深い学びを得られるようにしている。

また、学生がより積極的に楽しく心理学の課題に取り組めるように、できるだけ魅力的な内容の課題を出すように心がけている。例えば、「説得コミュニケーション」をテーマとした第7回授業では、説得の方略をより身近に感じてもらうために、「注意書き」などの看板の写真を撮影し、「自転車の駐輪問題」について効果的な注意書きを考える課題を出題した。「対人行動」をテーマとした第11回授業では、社会的痛みを理解するために、三角形や丸などの図形が動いているアニメーションを学生に見せて、それをどう解釈するのかを記述させた。単純な幾何学図形についても、社会的関係を読み取って感情移入してしまうことが体験でき、学生からは「課題が楽しかった」というコメントが多数寄せられた。これらの課題を通して、心理学は身近なものだということを実感してもらえよう工夫している。

3 公開授業に対するコメントと回答

<コメント1>

課されている小テストにおいて、設問ごとの配点が明示されていますが、配点の低い設問と配点の高い設問で回答率が異なるといったことはあるのでしょうか。

<回答>

小テスト（5問）の設問の配点は同じで、記述式課題（2問または3問）は設問によって配点が変わる。配点の違いによる回答率の差はほとんどみられない。小テストと記述式課題の配点は同じであるが、小テストのほうが提出率は高く、通常70%以上の学生が提出している。記述式課題の提出率はそれよりもやや低く、約65%の学生が提出している。

<コメント2>

最後に課されているボーナス課題は、課題などを提出せず、このままではD評価になりそうな学生に対する救済策の意味合いが強いと思うが、A+を狙う学生も積極的に取り組むように思われ



る。通常の課題の提出状況と異なるかどうか気になった。

<回答>

ご指摘のとおり救済策としての側面もあるが、心理学の発展学習として学生に心理学を体験してもらう目的で行っている。通常、ボーナス課題は授業内で実施している。今回の公開授業内で出題したボーナス課題は、授業内容の1つである「潜在的自尊心」を測定するための心理学実験であったが、パソコン上でし

か実施できないため、学生は授業後に取り組んだ。約10分の作業時間を要したが、通常の課題提出率より下回っているものの、5割以上の学生が提出した。多くの学生は「心理学＝心理テストや実験」というイメージをもっており、心理学実験に関する課題に興味をもって積極的に取り組む傾向がある。

4 おわりに

ご多忙の中、公開授業に参加していただき、貴重なご意見やコメントをいただいた先生方には、この場を借りて御礼を申し上げます。また、意見交換会において、他の先生方が授業運営でどのような工夫をされているのかについて、具体的な事例などを含めてお話を伺うことができ、とても参考になった。今後は、それらの有益なアイデアや方法を取り入れながら、自身の授業をより効果的に進めていくことを目指して、日々研鑽していきたい。

「日本史概説・日本史Ⅱ」

坂口 正彦

(経済学部経済学科 准教授)

1 はじめに

2023年12月1日、「日本史概説・日本史Ⅱ」の公開授業をさせていただいた。この経験をふまえて、授業運営における工夫点などについて述べる。

2 配付資料について

まず、公開授業後にご参加いただいた教職員の皆様より、「教室で示されたスライドには文字が隠されているところがあり、説明の段階になって付箋が剥がされ文字が見える仕掛けがなされている」点が参考になり得るとの感想をいただいた。この点と関連して、まずは講義の形式について述べる。

私は、少人数制の授業を除いて、以下のAとBの2つの形式を用いており、基本的にはA、「日本史概説・日本史Ⅱ」についてはBを採用している。Aとは、語句・数字を空欄にしたプリントを授業において配付し、学生が授業中に穴埋めする形式である。本学着任後に模索した結果、この形

式にたどりついた。配付するプリントには「(①)、(②)」のように記し、板書では「(①徳川家康)、(②百姓一揆)」のように板書していくと、学生が戸惑うことなく語句・数字を自らのプリントに書いていくことができる。

欠席者対応としては、授業翌朝に授業プリントを **manaba** に掲示している。ただし語句・数字は空欄のままとし、プリントの冒頭に「空欄に入る語句・数字は以下のとおり。どの空欄にどの語句・数字が入るのかは自分で考えること」と記し、「百姓一揆 大塩平八郎 徳川家康…」のように、空欄に入る語句・数字をバラバラに書いている。

B とは、授業で用いるパワーポイントを事前（授業 5～6 日前）に **manaba** で示す形式である。この形式は、他の学生が触ったプリントを学生が受け取ることを避けるために、新型コロナウイルス感染症対策として 2020 年度に採用した（私の授業では列ごとに一番前の学生に 1 列分をまとめてプリントを渡し、教員が教室の一番後ろで待ち、余ったプリントを回収している）。

授業では、重要な語句・数字を付箋で隠してパワーポイントを掲示し、付箋を順番に剥がしながら講義を進行している。これは同様の形式でニュースを解説するテレビ番組があり、私自身が付箋のなかに何が書いているのかが気になり、くぎ付けになってしまったことから、自らの講義において採用した。この形式について、公開授業時に学生アンケートをとったところ、とくに不満を書く学生はおらず、4 名ほどがわかりやすいと回答した。このうちの 1 名からは、「文字を読むだけではつらいのでありがたい」との声があった。今後も本学の方針、学生の状況、社会情勢に合わせて、A、B、あるいは新たな形式を模索していく所存である。



3 受講ルールについて

教職員の皆様からは、「最初に、パワポ・スクリーンに受講ルールを提示するのは参考になる」、「こうすれば、授業中にいちいち注意する必要がなくなる」という感想もいただいた。

講義形式の場合、私語を放置すると教室の秩序が乱れ、他の多くの学生が迷惑する。また教室内で唯一私語を注意できるのは教員であろう。私は授業前の段階から「受講ルール 私語の禁止・減点、頻繁な教室の入退室の禁止・減点」と書かれたスライドを掲示している。そのうえで 1 回の授業につき 2 回注意した学生に対しては、「当該学生を呼び出し、話し合いのうえ当該学生が納得する形で成績をつける」と宣言している。なお、2023 年度前期の授業アンケートにおいて、「静かな環境で学生が受講できるように配慮している」という項目は 5 点中 4.4 であり、効果がある方法だと考える。ただし 1 回の授業で 2 回注意し、話し合いの場を持った学生は登場していない。

4 授業内容について

こうした授業形式や受講ルールを設定したうえで、教員がどのような内容の授業を提供するのかという点が重要である。公開授業意見交換会（12 月 13 日）にて教職員の方々がおっしゃっていたように、私も学生が授業に向き合うことができるよう、学生の興味・関心のある題材を選択するこ



とを心がけている。たとえば公開授業時の単元は「戦後の社会」であり、学生が関心を持つように昭和・平成期の「新語・流行語大賞」を通して、当時の政治、経済、社会を理解するという形をとった。身近な話題を取り上げ、学生に興味関心を抱かせることは、本学着任後から一貫して模索し続けており、公開授業時の学生アンケートでも「興味をひきたてるような説明」の項目で高い評価を得た（記名式アンケートのため実際よりも評価

が高くなっている点に留意）。

「日本史概説・日本史Ⅱ」は教職課程に含まれる授業科目でもあることから、講義すべき単元・項目が定められている。講義すべき単元・項目について、教員がいかに身近な話題を提供するか、また学生がいかに身近な話題から考えるヒントを得て学ぶことができるかがポイントとなるであろう。たとえば、今回の公開授業時に学生が書いたコメントで、「消費税が最初は3%だったのに今は10%にも増えていることに関しては、なぜそうなったかを知りたいと思った」というものがあった。このような学生の問いをくみ上げ、双方向の学びを実現したい。

5 語りのスピードについて

一定の若者が1.5倍速、2倍速でもってYouTubeを視聴しているという情報を得たことがある。またゼミナールにおいて、YouTuberのような滑らかな語りで発表する学生がこの数年で増えたと感じている。そこで近年は、ややスピーディーな語りで授業を展開してきた。「名物」予備校講師や「話芸」で一時代を築いた名司会者の動画を視聴し、授業の参考にしたこともあった。学生の反応もまずまずと感じていた。しかし、公開授業では緊張していたため、より一層早口となってしまった。翌週からは考えを改め、標準～ややゆっくりのスピードでしゃべるようにしたが、そのスピードでもとくに問題はないことがわかった。公開授業をきっかけに、「スピーディーに語るべきである」との自分自身の思い込みを取り払うことができた。

6 おわりに 一心がけている点

授業というのは難しいものである。しかし、努力や小さな心がけで何とかなる部分がある。その努力や心がけについて思いつくことを列挙しておく。

- ・ぶっつけ本番で教壇に立つことのないよう十分に練習しておく。
- ・授業時に配付すべきプリントが足りなくなる「悲劇」を防ぐ。この「悲劇」はとくに教室秩序暗転のきっかけとなる。なお、授業プリント印刷の際は、無事に刷られているかをコピー機から目を離さず確認する。
- ・教室に設置されている各種機器の操作に習熟しておく。新しい教室が割り当てられた際は、教務課にお願いして教室が空いている時間帯に機器操作の練習を行う。
- ・余った授業プリントは少なくとも2箇所（出入口付近）に置く。1箇所ではなく2箇所以上にする

ことで、遅刻者の歩行が学生の集中を妨げる事態を最小限にとどめる。

- ・1～2 限授業時に主要路線が遅延している場合は、黒板の隅に「電車遅延により遅刻した学生は授業後に対応する。出入口のプリントを取り、静かに座ること」と記したうえで授業を進行する。こうすることで、やむをえぬ理由で遅刻した学生が安心して授業に集中できる。
- ・授業は「講義のまとめ → 補足説明 → 授業終了」ではなく、「補足説明 → 講義のまとめ → 授業終了」の順で進める。学生からみれば、講義のまとめと同じ集中度で補足説明を聞くことができる。

以上の点に留意しながら今後も努力を続けたい。

[謝辞]

自身の授業運営の現状を把握するうえで貴重な機会をいただきましたことに感謝申し上げます。



2 授業アンケート

2.1 実施方法

履修者の視点による対象授業に対する認識や取り組み状況を把握し、担当教員が授業運営の点検・評価や改善の指標として活用することを意図した授業アンケートが、前期後期ともに第 14 週授業 [前期 2023 年 7 月 18 日 (火) ～7 月 24 日 (月)、後期 2024 年 1 月 9 日 (火) ～15 日 (月)] において、出席確認システム Saai-MAS を利用して実施された。第 14 週授業での実施が難しい場合は、翌第 15 週に実施することが認められている。

新型コロナウイルス感染症 (COVID-19) の流行を受け、2020 年度前期より授業はすべてオンライン形式となった。これに伴い、授業アンケートの方法および質問項目は、従来の対面授業を前提としたものからオンライン授業に対応したものになり*、これが昨年度まで継続された。2023 年度前期から全面的に対面での授業が開始されたことにより、今年度の授業アンケートは、従来の対面授業に対応した方法、すなわち 18 の質問項目について教室内において回答する形式に戻った。

*詳しくは 2020 年度 FD ニューズレター (https://ouc.daishodai.ac.jp/uploads/7749a2025f8dbe435899a93f5b0b601b_1.pdf) を参照

2.2 対象科目

各教員の授業アンケートの対象科目は、原則として、演習科目および体育系の実習科目を除く担当科目のうち、履修者数が最も多い科目となっている。履修者数や担当科目の変動によって、必ずしも毎回同じ科目が対象になるわけではない。このため、「同一科目の経年比較をしたい」「別の科目に関する学生の意識や反応を知りたい」など、教員の要望や判断により対象科目を変更することも可能である。

2.3 教員からのフィードバック

授業アンケート結果に対するフィードバックとして、各教員は出席確認システム Saai-MAS から集計結果を確認したうえで、感じた点や学生にフィードバックすべき点、授業運営で工夫している

点について、「振り返りシート」に自由記述形式で記入し提出することになっている。今年度前期は2023年8月31日（木）に、後期は2024年2月29日（木）に提出期限が設けられた。

2.4 集計結果の開示方法

授業アンケートの集計結果は、本学図書館で閲覧することができる。また、各教員による「振り返りシート」の記述内容の一部は、本学ホームページのFD活動ページ（https://ouc.daishodai.ac.jp/profile/educational_research/fd/）、「＜参考資料＞ 学生の学びを支援するための取組み紹介」の＜取組み例＞に掲載されている。

3 FD 研修会

今年度のFD研修会として、2023年9月5日（火）14:45よりユニバーシティホール蒼天において、生成AIに関する講演が行われた。講演者はEYストラテジー・アンド・コンサルティング株式会社エンタープライズリスクパートナーの川勝健司氏、講演タイトルは「生成AIの概要とAI生成物の利用段階における留意点」であった。

今回、研修会のテーマに生成AIを取り上げた理由として、その利用が大学の教育現場にも波及するようになったことがあげられる。米国の研究開発企業OpenAIが、人の質問に対し自然な文章で回答する対話型AI「ChatGPT」を2022年11月に公開して以来、生成AI（Generative Artificial Intelligence）の利用に関する議論が幾度も起こっている。例えば、「G7 広島首脳コミュニケ（2023年5月20日）」において、生成AIに関する議論について次のように言及されている。

この観点から、我々は、関係閣僚に対し、生成AIに関する議論を年内に行うために、包摂的な方法で、OECD及びGPAIと協力しつつ、G7の作業部会を通じた、広島AIプロセスを創設するよう指示する。これらの議論は、ガバナンス、著作権を含む知的財産権の保護、透明性の促進、偽情報を含む外国からの情報操作への対応、これらの技術の責任ある活用といったテーマを含み得る。

（「（仮訳）G7 広島首脳コミュニケ（2023年5月20日）」（<https://www.mofa.go.jp/mofaj/files/100507034.pdf>） p. 28）

生成AIの開発・利用を取り巻く環境は変化の過程にあり、その影響は多方面に及ぶ。よって、大学での教育活動の視点から課題検討を進める際にも、まずは適切な情報をもとに概要を把握、整理したうえで、論点を絞って取り組むことが肝要と考えられる。この点から、企業・組織の生成AIサービス活用に詳しい川勝氏を講師に迎え、生成AIならびにChatGPTとは何かという説明に始まり、生成AIを取り巻く企業・組織および政府の動き、そして大学の教育活動での生成AIの利用における留意点について解説していただいた。

＜備考＞

FD研修会は、昨年度より、大阪樟蔭女子大学と締結した教育・研究等に関する連携協定書の対象事業となっている。本学における今年度FD研修会（上記）では、大阪樟蔭女子大学から教職員9名の参加があった。また、大阪樟蔭女子大学でのFD・SD研修会として、2024年1月25日（木）にNTT西日本の櫛山和也氏による講演「生成AIの動向と教育現場での活用について」が行われた際には、本学から教職員7名が参加した。

4 大学院 FD 活動

本学における大学院FD活動の一環として、修士論文中間報告会が2023年10月14日（土）に開催された。以下は、大学院地域政策学研究科の宍戸邦章教授による報告である。

「2023年度修士論文中間報告会」開催される

宍戸 邦章

（大学院地域政策学研究科 教授）

大学院地域政策学研究科の「2023年度 修士論文中間報告会」が10月14日（土）10：00～15：00（於6号館621教室）に開催されました。地域政策学研究科は、経営革新専攻と地域経済政策専攻からなりますが、経営革新専攻からは2名、地域経済政策専攻からは6名が報告しました。発表時間は1人15分間で、報告後は約10分間の質疑応答が入ります。報告した大学院生の氏名、指導教員、論文題目は表1のとおりです。

表1 2023年度 修士論文中間報告会 論文題目一覧

＜経営革新専攻＞（司会：和田 伸介）

氏 名	指導教員	論文題目
曾 曉峰	太田 一樹	日本製造業におけるスピノフに関する研究 －親会社との関係を中心に－
馬 芸	加藤 司	日本社会派化粧品の販売に関する研究

＜地域経済政策専攻＞（司会：宍戸 邦章）

氏 名	指導教員	論文題目
袁 忠帥	鎌苅 宏司	秩父地域における内発的発展について －秩父産葡萄を用いたワイン製造販売とレストラン事業の展開－
魏 丹陽	鎌苅 宏司	日中文化政策の違いとその結果
李 松甫	閻 和平	高齢化時代における住環境改善の日中比較研究 －高経年マンションエレベーター設置問題を中心に－
馮 偉	石川 雄一	大阪鶴見区中国人朝市の成立過程と利用動向からみた課題に関する研究
松浦 康之	石上 敏	東大阪市における文化力 －その現状と発展の条件－
重松 大晴	西嶋 淳	地域公共交通の持続可能性に関する研究

この報告会は、当該年度に修士論文の提出を希望する院生が、論文の構成や内容等を報告し、さまざまな専門領域にわたる大学院担当教員から質問や助言を受けることを通して、各自の論文をより一層充実させることを期待して行われています。大学院に在籍して2年目の院生が主に報告していますが、1年目の院生も聴講しており、次年度の論文提出に向けた取り組みを点検する機会ともなっています。この報告会は、院生の相互研鑽と研究能力の育成に資するものであると同時に、指導教員が出席した他の教員による院生への質問や助言を通して、論文指導能力をより向上させていく大学院FD活動の一環でもあります。

＜報告後の質疑応答の様子＞



経営革新専攻 馬芸さん



地域経済政策専攻 馮偉さん

質疑応答は約 10 分間ですが、いずれの報告に対しても活発な議論が行われ、時間を超過することがほとんどでした。出席した教員からのコメントや質問・助言は、主に次のような観点から行われます。

- ①地域政策学研究科の修士論文に相応しい主題設定になっているか
- ②研究の目的・成果が明確であるか
- ③先行研究を踏まえたオリジナル性の高い研究となっているか
- ④研究・分析方法の選択が妥当であるか
- ⑤論文構成や文章表現が適切であるか

各報告内容は先行研究の整理がなされ、フィールドワークやデータ分析に基づくものが多く、充実した印象をもちましたが、報告後の質疑応答については教員からのコメントや質問に対する院生の応答が的確になされていない場面が散見されました。留学生の場合、日本語の能力に左右されることも大きいかもしれませんが、質疑応答についてもより有意義なやり取りとなるように普段の授業から経験を積んでおく必要があるかもしれません。

院生の皆さんは、1月上旬に修士論文を完成させ、その後副指導教員も含めた審査に臨みます。この報告会がよりよい修士論文の執筆に繋がる機会になることを願います。



《編集後記》

FD ニュースレター第 25 号が完成しました。これもひとえに関係者の皆様のご協力あつてのことです。公開授業にご協力いただいた先生方、そして FD 委員会の先生方に、この場を借りて御礼申し上げます。

研究の参考にと、終末期医療に関する資料を読んでいます。医療分野でも、これまで常識と考えられていたことが最近の研究により覆され、臨床のあり方が見直されているようです。患者が意思決定できるうちに医師や家族と話し合い、いざという時の治療方針を選択しておくことが、患者の満足度の向上および家族の後悔や罪悪感、ひいては悲嘆反応の軽減につながる... というわけで、自分や家族の行く末についてあれこれ考える今日この頃です。(陽)

大阪商業大学 FDニューズレター 第25号

発行日：2024年3月20日

発行：大阪商業大学FD委員会

〒577-8505 東大阪市御厨栄町 4-1-10

Tel 06-6781-8816 Fax 06-6781-6156